



Title	テーオドーア・フォンターネ『エフィ・ブリースト』と『ポッゲンプール家の人々』：貴族階級の女性と奉公人たち
Author(s)	赤木，登代
Citation	独文学報. 1998, 14, p. 39-54
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103038">https://doi.org/10.18910/103038</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# テオドーア・フォンターネ『エフィ・ブリースト』と 『ポッゲンプール家の人々』

—— 貴族階級の女性と奉公人たち ——

赤 木 登 代

はじめに

テオドーア・フォンターネ (Theodor Fontane 1819–1898) は、『エフィ・ブリースト』*Effi Briest* (1895) で作家として真の大成功<sup>1</sup> を収めた翌年、『ポッゲンプール家の人々』*Die Poggenpuhls* を発表する。

この小論では、この2つの作品に登場する19世紀末の貴族階級、ドイツ語でユンカー (Junker) と呼ばれている階級の女性たちの暮らしぶりに注目する。そして、彼女らの行動がいかに当時の社会規範に規定されていたかを、社会史の資料を参考に明らかにしていく。その際、彼女らの家で共に生活していた奉公人たち、特に女中の存在にも同時に目を向ける。それは、女中たちの存在が貴族の女性の日常生活に欠くことができない存在であったからである。

そのあとで、最後に2つの作品を比較して、その構造上の違いを分析し、それぞれの内容と形式との関連に言及していくこととする。

## 1 貴族階級の女性たち

『エフィ・ブリースト』の女主人公17才のエフィは、ある日突然に両親から38才のインシュテッテン男爵との結婚を言い渡される。彼女は自分の結婚に関して、漠然とした不安を抱きながらも、両親の意見に従う。

「つまりね、おまえにいわなければならないんだけど、エフィ、インシュテッテン男爵がたったいまおまえを妻に欲しいとおっしゃったの

よ。」「わたしを妻にですって。まじめなお話なのかしら。」「冗談に  
するようなことじゃありませんよ。おととい彼に会って、おまえも彼の  
ことが気にいったでしょう。もちろん、彼はおまえより年上だけれど  
も、それは結局幸運なことだし、それにすばらしい人物だし、地位も  
あるし、上品な作法も身につけていらっしやる。おまえがいやだって  
言わなければ、わたしの利口なエフィがそんなこというなんて考えら  
れないけど、おまえは他の人たちが40才でたつところに20才でたてる  
のよ。おまえはママをはるかに追い越してしまうわ。」(18)

こういう母自身もその昔恋人だった、まだ若く地位も低かったインシュ  
テッテン男爵とは結婚せず、年上のブリストと結婚したのである。いま  
そのかつての恋人が娘と結婚するのだ。この母と娘の結婚はどちらも、あ  
きらかに恋愛感情によるものではなく、地位、経済力といった社会的要因  
に基づいた結婚である。当時貴族の女性は結婚相手をみずから選択するこ  
とはできなかった。

エフィはこの結婚によって父親という保護者の手を離れ、今度は夫に保  
護される立場となった。この作品と同時代の女権拡張論者ルイーゼ・オッ  
トー・ペータース (Louise Otto-Peters) は1876年に発表したその著『ド  
イツ帝国における女性の生活』*Frauenleben im deutschen Reich* の中で  
多くの若い女性の独立性のなさは、母親の教育方針が間違っているせい  
であり、つねに服従を強いられると、自分でなにかを決めることが不安にな  
ると指摘している。<sup>2</sup> エフィもなにかを自分で決めることはできないし、  
その必要もない。そういう教育を受けてきたのだ。結婚すらも両親に決め  
てもらうのである。そして、結婚後は何事も夫インシュテッテンに従う生  
活を送ることとなる。

エフィはオットー・ペータースによって主張されている女性のあるべき  
姿、つまり独立した存在としての女性とは対極の位置にある。しかし、ま  
だ現実には女性の自立というものに開かれた社会ではなかったのである。ま  
た、17才という早い結婚——このころの貴族の女性の結婚年令は20代半ば  
であった<sup>3</sup>——は、作品中で彼女がまだなにも知らない、無垢なる存在で  
あることを象徴している。

当時の貴族の結婚では、なによりもまず、「階級にふさわしい」(standes-

gemäß) ことが絶対に必要な条件であった。エフィの結婚はこれにかなう「模範的結婚」(Musterehe) である。エフィの両親は、それゆえ、この結婚で娘が幸せになれると確信していた。この作品は、その当時の階級にふさわしい結婚を破綻させることで、その規範の矛盾を暴くことになるのである。

さて、一方『ポッゲンブル家の人々』ではどうであろうか。この一家もやはりユンカーであるが、家長である父親が死に、かなり経済的に困窮している家族である。家族は未亡人と娘3人に息子2人である。子供たちはみな成人しているが、全員独身である。まず物語のはじまりのところで家族全員のプロフィールとその暮らしぶりが詳しく述べられている。とりわけ、経済的困窮がかなりのものであることが、その住居の詳細な描写からはっきりと読者にわかるようになっている。彼らは7年前にボンメルンシュタールガルト (Pommersch-Stargard) からベルリンに引っ越したとき、まだ「壁が乾いていない」新築のアパートを借りた。その頃は壁の乾いていないアパートは健康に悪いとされ、壁が乾くまでは家賃が安かったせいもあって、お金にゆとりのない人が借りるものであった。これは『エフィ・ブリースト』の中でも、エフィがインシュテッテンの転勤でベルリンに引っ越すことになり、いっしょにアパートを探しているときの母親の科白にも表れている。

「そんなことはだめですよ、エフィちゃん」とブリースト夫人は言った。「たんに健康のことを考えただけでもそんなことは許されないんですよ。それにね、枢密顧問官は壁が乾いていないアパートに住むような人じゃありませんよ。」(196)

インシュテッテン家とポッゲンブル家では同じユンカーといってもその経済的状況は大きく違っていることが、このエピソードだけからも窺える。ポッゲンブル家は、家の中も「当然のことながら、ポッゲンブル家の家具調度品も家族が置かれている状態を物語っているものであった」(481)という貧しいものである。しかし、カーペットやマットなどは古びたものではあるものの、清潔に保つことだけは怠っていない。

このようにポッゲンブル家の人々は暮らしており、たとえ細々とした暮らしの中でも、ただきちんとした信条をもって、そしてもちろん器用さをともなっていないといけなければ、満足して、まずまず階級にふさわしく生きることができるのだと世間に示していたのである。このことは、管理人のネーベルングさえも頭をふりながら、しぶしぶではあるが認めていたのだ。(482)

この状況の中でこの一家は、金銭的なことはさておき、何より「階級にふさわしい」ふるまいを第一の価値基準にしていることが強調される。特に娘三人の対世間の接し方を通して、それは明らかになる。母はすでに体の不調から、少し弱気になり、愚痴をこぼしている。でも、3人の娘たちが、それぞれ違ったやり方で一家の誇りを守ろうと努めているのだ。長女のテレーゼ (Therese) は、ほとんど才能といったものはない娘であったが、貴族としての誇りだけを武器に社交の世界へ入ってゆき、一家のために願いごとをし、うまくかなえてもらい、家族の生活を助けているのである。そして、次女のゾフィー (Sophie) こそが、実際面で一家の生活をささえている。当時は市民階級ですら女が働くことは体裁の悪い時代であった。それは「ブルーストッキング的である」、つまり「淑女らしくない」行為なのであった。<sup>4</sup> しかし、没落したとはいえ貴族の娘のゾフィーが、働いて収入を得ているのである。彼女は多才な人物として紹介される。絵や詩、それに音楽の才というにおよばず、プロ顔負けの料理もやってしまうほどである。だが、才能だけをもっていても、当時の貴族の女性が働いて収入を得ることは難しい。そのような才能ある女性のための職場が存在しているわけではなかったからだ。そこで三女のマノー (Manon) の活躍がそれを助けている。彼女は姉のような才能こそなかったが、テレーゼよりももっと社交というものに長けており、出入りしている裕福な家のこどもたちの家庭教師として姉を如才無く斡旋するのである。特に「非キリスト教徒の家庭」、つまりは裕福なユダヤ人家庭に出入りし、こどもの教育を助けてあげるといふ形、報酬だけでなく、感謝と尊敬が得られるというやり方で、体面を保ちつつ収入を一家にもたらしている。そして、その収入は、実は表向きには一家をささえているはずのわずかな年金をこえることもあるほどだったのである。

しかし、彼女らは2人の男兄弟に代わって、一家の生活をささえていることをまったく苦にしていらない。というのは、二人の兄弟は軍隊に入っており、彼らが同じく軍人であった父以上に一家の名誉を高めてくれることを期待し、確信しているからである。たしかに、兄のヴェンデルリン(Wendelin)は冷静沉着で、才覚もあり、軍内部で出世し、期待にこたえてくれそうだが、弟のレオ(Leo)の方は「勇猛果敢さ」だけが取り柄で、決闘を2度もやらかし、借金を増やし続ける問題児である。でも、このレオも次の戦争ではその勇猛さでもってかならず手柄をたててくれるはずとの希望を娘たちは持っているのである。

可能ならば、この家族の名誉をさらに高めることが、姉妹3人組があらゆる手段を講じてめざしていることであった。(484)

この2つの作品を通じて一貫していることがある。つまり、この階級にとってもっとも大切なもの、それは「名誉」であるということだ。登場人物たちはすべてこの階級にふさわしい「名誉」に従ってふるまうのである。そして、この「名誉」はあらゆる「らしさ」を要求する。つまり、貴族らしさ、男らしさ、そして女らしさといったものを生み出し、人の行動を厳しく規制するものなのだ。<sup>5</sup>

エフィはまさにこの名誉のために結婚し、一方ポッゲンブル家の娘たちはそれゆえに結婚を諦めているのである。

「じゃあ、すべてはこのままなの？」

「そうよ、結婚だなんてとんでもない。そんな馬鹿なことを考えちゃいけないのよ。わたしたちはこのあわれな娘のまんまよ。でも、ママはいいものを食べられるようになるし、レオは赤道へ行く必要がなくなるっていうわけよ。というのも、わたしが思うには、彼の借金もブルーメンタール家とかフローラなんかの助けなしに返済できるんだから。でもフローラ自身はずっとわたしの友達よ。これこそがわたしの望んでいたことよ。そして、わたしたちは幸せに満足して暮らしていくのよ。ヴェンデルリンとレオがひとかどの人物になって、ゾール連隊やホーホキルヒの勇士〔ポッゲンブル家の先祖のひとり〕とは違っ

た大物がうちから出るまでね。」(576)

ポッゲンブルの3人の娘たちには、伯父の死後遺産が入ってくるが、それは生活に必要な利子を得るために貯蓄しておく必要があり、またレオの借金も返済してやらないといけないのでやはり自由になるお金はない。つまり、彼女たちはお金がないので、階級にふさわしい結婚ができないのである。彼女らの結婚にはかならず持参金がいるし、それにふさわしい支度が必要だからである。当時貴族が経済的に困っているのは、ポッゲンブル家特有の現象ではなかった。その結果、貴族が新興ブルジョワと結婚することはもちろん、いざとなればユダヤ人との縁組を考える貴族がいるくらいであった。ここではマノンユダヤ人の家に入出入りしていることを恥じているところもあり、この遺産でお金のためにユダヤ人と交際しているという負い目を取りのぞかれるのを喜んでいるのである。

一方エフィはこの「名誉」ゆえに破滅することになる。若く美しいエフィは妻として、インシュテッテンの名誉を高める存在であった。しかし、不義を犯してしまう。この当時の不義というものに関する貴族および教養市民層の考え方について、ウーテ・フレーフェルトは『男と女、そして女と男—近代における性差』„Mann und Weib, und Weib und Mann“ *Geschlechter-Differenzen in der Moderne*.<sup>6</sup>の中で、次のように説明している。男の名誉は妻の姦通によってもっとも深く傷つけられる。しかし、男の浮気は男自身の名誉も、いわんや妻の名誉も損なうことはないのである。それは、女性の生きる場は家庭だけであり、それを損なうと、もはや生きる場はないのであり、男性は家庭以外にも職場など社会において生きているのであるから、彼は傷つかないのである、と。これが当時の一般的な考え方であり、不義を犯したエフィは社会から追われ、その後彼女を受け入れてくれる場所はどこにもなかったのである。

## 2 女中たち

1885年、ベルリンで働く女性全体の32%が家事奉公人であった。当時貴族層のみならず、市民層、それもあまり裕福とはいえない家でも女中を雇い、家事労働を委ねることが体面を保つ上で必要なことであった。<sup>7</sup>

『エフィ・ブリースト』にはロスヴィータ (Roswitha) という女中が登場する。彼女はエフィによって、窮地を助けられ、子守女として奉公することとなり、エフィの没落後もその死まで忠実に仕える召使である。ロスヴィータは、当時の女中の姿を実によく映しだしている。当時のベルリンの女中たちは、ほとんどが周辺の農村や小都市の出身で、その親は貧しい職人や官吏、農夫といったものたちであった。彼女らは主に次のような動機からベルリンへ奉公のため出てきた。ひとつには、農村で女中奉公するよりもベルリンで働くほうが賃金が高かったからであり、またあるものは、大都会ベルリンの華やかさへの好奇心から故郷を後にした。さらには婚姻外のこどもを生んだがためにその共同体にいられなくなったような娘たちも少なくはなかった。そんな彼女らにとって、よりよい奉公口をみつけることが彼女らの生活、ひいては全人生を左右した。つまり、彼女らはこのころ、ほとんど主人の家に同居し、食物から洋服まで、すべてを支給されていたからである。そして、彼女らの身分はたいていは非常に不安定で、主人の都合で待遇が変わり、ひどいときには主人たちが旅行にいくというような簡単な理由で解雇され、路頭に迷ってしまうことすらあった。さらに、行くあてのない娘は、やがて売春をせざるをえない状況に追い込まれることもあったのである。

ロスヴィータは、主人である登記官の未亡人を失ったあと、その墓の近くでこれからの生活に絶望している。亡き女主人も貪欲で、無節操であった上に、その遺族からもほんのわずかのお金（ベルリンに帰る汽車賃ぎりぎり程度）しかもらわず、途方に暮れているのである。彼女はのちに本人の口から繰返し語られるように、未婚のまま出産し、鍛冶屋である父に家を追われベルリンに出てきた不幸な身の上であった。また、彼女は当時の奉公人がもっていた「奉公人手帳」(Gesinde-Dienstbuch) というものをもっている。これは役所の承認を得て、口入れ屋が発行するもので、名前、年令、顔の特徴などが記載されているものである。まず田舎から出てきた娘たちはこれをもって最初の奉公先へ出向くのである。<sup>8</sup> 彼女は、雇用されるために、つまりインシュテッテンの許可を得るためにこれを提示し、問題がなかったので、晴れて採用される。このように彼女の境遇は当時のベルリンの女中のまさに典型なのであった。当時の読者は彼女のような女中の身の上についてよく知っていた。それゆえ、読者はロスヴィータ



にとってエフィの好意がどれほど貴重でありがたいものであったかということを読みとり、彼女が何があっても最後までエフィに忠実に仕えたことに、つまりその情愛あふれる主従関係に感動するのである。

一方ポッゲンブル家にも奉公人がいる。家の経済状況を反映してたったひとりである。<sup>9</sup>

この「ベルリンの間」のうしろには、[……] 吊り棚つきの台所があった。ここに忠実な老女中のフリーデリーケが住んでいる。彼女は〔今は亡き〕だんなさまをも知っており、少佐夫人の信頼を得て、一家のあらゆる幸福を、最近ではシュタールガルトからベルリンへの移住をも共にしてきた。(482)

この「吊り棚」というものは当時のベルリンの悪名高い女中用のベットで、台所にあり、狭苦しく、快適とは程遠いしろものであった。<sup>10</sup> 女中にはプライヴァシーなどはなかった。(もっとも、このポッゲンブル家ではアパートが狭いため、母と娘たちはみんないっしょの部屋で寝ており、さらにベットもきちんとしたものは3つしかなく、ひとりは背のないソファをベット代わりにしなければならぬほどなので、女中だけに限ったことでもない。) このフリーデリーケは台所で寝泊りし、家事いっさいをとりきっている。当時裕福な市民や貴族の家には女中が何人もいるのが普通で、その役割が分かれており、子守女 (Kindermädchen)、料理女 (Köchin)、部屋女中 (Stubenmädchen) が働いていた。<sup>11</sup> しかし、この家では、彼女はひとりでだれよりも早く起きて、買物にでかけ、朝食の準備をする。冬にはかまどに火をいれ、部屋をあたため、そうじをし、ときには洗濯も主人たちが起きてくる前にやってしまうのである。

このフリーデリーケが家族について語る場面がある。

ポツダム通りの角から再び家まで帰る道で、フリーデリーケはいろいろなことに思いをめぐらせた。「ほんとに感激させてくれちゃうんだから」と彼女はいった。「以前いたところのお金持ちのひとたちのことを考えてみれば、およそ人間なんてもんじゃなかったねえ。それと比べりゃ、このポッゲンブルの人たちってば！ お金はぜんぜん持つ

てはいないんだけど、それにときどき遠慮がちにいわなきゃならないこともあるしね。『奥様、雑巾がもう使いもんにならないです』ってね、でも、みんなそれぞれいいところがあって、テレゼ様もね。たしかにちょっといばってるけど、そもそもそれは悪いことじゃないし、それにレオちゃん。のらくらもので、ほら吹きだっておっしゃってる奥様のいうとおりの人だけど、ほかのお嬢様たちと同じくうぬぼれ屋。奥様だけはそうじゃないので、あんまりお悩みが多すぎて、それは身にこたえるもんだよ。でも人間は人間で、その点ではみんな同じなんだもの。」(531f.)

これは、フリーデリーケがレオから思いがけずチップを弾んでもらっている科白である。この独白の中に、この年老いた女中が、少ない賃金で家事をひとりでこなしているにもかかわらず、長年にわたる奉公のうちに主人の家族と深い主従関係で結ばれていることが示されている。それに彼女は家族のひとりひとりの性格もよく把握していて、その上で暖かな口調で語っている。このような階級をこえた愛情、主従関係の深さは先に述べたように『エフィ・ブリスト』におけるエフィとロスヴィータの関係にも認められる。フォンターネは奉公人のおかれた厳しい状況を描きつつ、一方で、ときには彼女らが愛情という面においては単なる同居人以上、家族同様の存在でもありえたということを描いているのである。

### 3 女性の自立

このような家事奉公人の存在によって、教養市民と貴族の女性たちは労働というものから解放されていた。さらにエフィは、経済的な意味での生活の心配というものとも生涯無縁であった。娘時代は当然両親の保護のもとに、そして結婚後はエリートである夫のもとで、そして不義が発覚し、ひとりで暮らすようになってからでさえも、両親からの仕送りで、多少はつましい暮らしを余儀なくされるものの、自らは働くことなく、ロスヴィータに身のまわりの世話をしてもらいながら暮らしているのである。

エフィがインシュテッテンに嫁いだあとの暮らしは、貴族の女性の典型をなしている。つまり、社交が唯一彼女の仕事であり、特にそれが活発に

行なわれる冬には他家を訪問したり、パーティに出かけたり、また遠足にでかけたりして日々を過ごしている。そして、家にいるときは、ピアノをひいたり、刺繍や読書をしたりしている。また、体調がすぐれなければ、バート・エムス (Bad Ems) やシュヴァルバッハ (Schwalbach) といった貴族専用の温泉保養地へでかけるのである。

エフィがこんな生活の中で感じていた不安は何であったのであろうか。たしかに突然大人の世界へ放りこまれた未熟な若い17才の娘の不安であったともいえるが、彼女は退屈から不安に陥ったのではないだろうか。そして、なによりもその生活には目的あるいは希望というものが欠けていた。

「おまえ、たんにはしゃいで、浮かれた気分でそんなことをいうのかい？」

「ちがうわ、ママ、本気でいっているのよ。愛が一番にきて、そのあとすぐに栄光と名誉でしょ、そして気晴らしが来るのよ。そう、気晴らし、いつも何かあたらしいこと、いつも笑ったり、泣いたりしてしまうようなこと。がまんできないのは退屈なのよ。」(32)

エフィは愛というものを知ることなく、両親によって決められた名誉のための結婚をした。そして、ケッシーン Kessin (架空の町であるが、ヒンター・ボンメルンにあるという設定) という小さな田舎町に住むことになる。夫とする外出といえば、社交のためである。だが、貴族の妻として一番の義務である社交の場において、彼女の望むような楽しみや喜びは得られないのであった。彼女が自覚しているように、ついこの間まで両親のもとで、ブランコを力いっぱいこいでいた彼女のエネルギーは、やり場を失ったのである。もっとも我慢できない「退屈」というものが支配する生活、それが彼女の結婚生活であった。そもそも、エフィに限らず、貴族の女性の生活とは退屈が支配しているのが普通であったのだが。

「名誉」に関しては、宰相のおばえめでたい夫インシュテッテンの名誉は十分なものであった。当時の貴族の女性の名誉とは、地位ある男性の妻でいるかどうかであったから、彼女は階級にふさわしい名誉に恵まれていたのである。しかし、それだけでは満足できなかった。彼女はこの点で当時の男性中心の価値観を完全に受け継いで、それに納得している、あるいは

は諦めている存在とはいえないのである。そして、彼女は退屈から不安になり、不義を犯し、その社会から追われることになる。

エフィのような離婚した女は、また再び実家の経済的援助を受ける以外に生きていく道はなかった。また、ポッゲンブル家の3人娘たちのような生涯未婚の娘も、実家に残って生活をつづけるほかはなかったのである。このころ、すなわち19世紀末になってもまだ一連の女性運動の波はこの貴族の女性たちの頭にはほとんど届いていなかったのだ。

1865年にライプチヒでルイーゼ・オットーを議長として「全ドイツ協会」Allgemeine Deutsche Verein が設立された。これは1849、50年に最初の女性運動が政治的に弾圧されて以来の、あらたな「市民女性の教育権と就業権」を求める団体であった。この協会を契機として、その後多くの団体ができた。特に1866年にベルリンで成立した「女性の就業能力促進のための協会」Verein zur Förderung der Erwerbsfähigkeit des weiblichen Geschlechts は、のちに「レッテ協会」Lette-Verein と呼ばれるが、女性のための職業紹介所と手芸品のバザーを始めて、女性の就業能力の拡大に尽力した。<sup>12</sup> ただし、この協会は過去の弾圧の歴史に鑑み、女性参政権獲得の運動には積極的でなかった。

エフィはこの協会については知っていて、離婚後に家庭教師の口でも紹介してもらいたいと思っているが、自分の立場をわきまえて行くことはできないともし、もはや何をしても社会に参加できないことを嘆いている。また、ポッゲンブルの娘たちは経済的理由で働く必要があるにもかかわらず、この協会のお世話になっている場面はでてこない。だが、フォンターネの『ジェニー・トライベル夫人』*Frau Jenny Treibel* では、ギムナジウムの教授の娘コリンナ (Corinna) がこの協会でかけはぎの技術を身につけたと自慢する場面がある。彼女は教養市民階級に属しており、女性の立場や仕事に対して、関心をもっているようである。このことから、ポッゲンブル家の娘たちが「働く」ということに対しては、あくまで貴族階級にふさわしくないものとして、否定的態度をとっていたことが明らかになる。

しかし、2つの作品の中では、女性の自立ということについて否定も肯定もされていない。『エフィ・ブリスト』においては、エフィは男性社会の価値観により破滅するのであるが、それは即座に女性の自立を阻む社

会への批判と解釈することはできない。また『ボッゲンブル家の人々』でも、母親と3人の娘たちはひたすら2人の男兄弟によって、再び名誉が回復されることを望んで、彼らを助けるべく、日々努力しているのである。自分たちが社会における地位を得ようとするのではなくて、家族内の男性によって勝ちとられた名誉は女である自分たちの名誉でもあると思っているのだ。ただ、この2つの作品に共通して表現されていることは、男女というジェンダーによる差別にではなく、ユンカーという階級にたいする批判および揶揄なのである。

## むすび

以上『エフィ・ブリースト』と『ボッゲンブル家の人々』をその主人公である女性たちと彼女らに仕える女中に焦点をあてて考察してきた。この2つの作品は同じユンカーに属する人間を中心とする作品であるが、その経済的状況はかなり違っている。前者は裕福で、後者はかなり財政が逼迫している。だが、経済状況は違えども、同じ階級にふさわしい「名誉」に縛られて生きるものたちである。

フォンターネは『ボッゲンブル家の人々』が批評家たちに好意的に受け入れられたことに気をよくして、こう述べている。

人々がこのあるがままの無を[……]その形式ゆえに好ましいものとして受け入れたことに、わたしのこころは大きな希望で満たされるのである、私自身のためではなく、我々の文学の未来への希望でもって。<sup>13</sup>

つまり、彼はこの作品において、いままでの作品の形式にピリオドを打って、新しい形式をめざしたのである。前作の『エフィ・ブリースト』では、時代背景は悲劇を作り出す要因として、詳細に描かれているのであるが、主人公エフィの運命が一本の糸となって物語を貫いている。フォンターネは当時世間を騒がせた実際の出来事（妻の不義の相手を夫が決闘で撃ち殺した事件）にインスピレーションを得て、この作品を執筆した。しかし、そこで彼はエフィという生氣あふれる魅力的な若い娘を、言い換えれば、

その時代をこえた人間らしさを体現している少女を、悲劇の主人公として作り出し、滑稽なまでに時代の典型たる「名誉」を固持する貴族官僚インシュテッテンと結婚させ、破滅させることによって悲喜劇を創作したといえるのである。

しかし、一方の『ポッゲンブル家の人々』では、そのような大きな筋の展開は見られない。その作品の主となるものは、ポッゲンブル家の暮らしぶり、そのものである。だれが主人公とは特定できないし、またどの登場人物たちも特に人間的な魅力を持ち合わせてはいない。ただ、当時の読者たちに、このような家族がたしかに実在しているような印象を抱かせることをめざしたのである。つまり、19世紀末ドイツ帝国での社会の一部として、没落したユンカーの生活を記録することが、この作品の目的なのである。そして、この筋をもたないという形式は次作である『シュテヒリン湖』*Der Stechlin* において発展し、より多角的に時代を描くロマンとなるのである。

#### テキスト

フォンターネの原典からの引用は下記を底本とし、本文中ではそのページ数を括弧内に示した。

Theodor Fontane: *Werke, Schriften und Briefe*. Hrsg. v. Walter Keitel und Helmut Nürnberger. 2. Auflage. München 1974, Abteilung 1. Bd.4.

#### 注

- 1 Vgl. Charlotte Jolles: *Theodor Fontane*. Vierte Auflage. Stuttgart und Weimar 1993, S. 79. フォンターネ研究においては、1919年にコンラート・ヴァンドライ (Conrad Wandrey) が下した評価「『迷い、もつれ』*Irrungen, Wirrungen* はドイツ文学において常に高い位置を占めることになる。『エフィ・ブリスト』でもって、フォンターネは世界文学にそびえることとなるのだ」は、いまでも変わっていない。
- 2 Vgl. Ingeborg Weber-Kellermann: *Frauenleben im 19. Jahrhundert*. 3. Auflage. München 1991, S. 103.

- 3 Vgl. Ebd., S. 116.
- 4 Vgl. Ute Frevert: *Frauen-Geschichte. Zwischen Bürgerlicher Verbesserung und Neuer Weiblichkeit*. Frankfurt am Main 1986, S. 119.  
この本は日本語に翻訳されており、参考にさせていただいた。ウーテ・フレーフェルト『ドイツ女性の社会史 200年の歩み』若尾祐司他訳 晃洋書房 1990年
- 5 貴族階級や教養市民層が、他の階級とみずからを差別化する行為として、名誉を傷つけられたときに行なう「決闘」(Duell)があった。この決闘という行為について、歴史的、社会的な背景から研究したものに Ute Frevert: *Ehrenmänner*. München 1991. がある。同書から、作品の舞台となっている19世紀末のドイツにおいては、「決闘」はまだ名誉を守る手段として認知されていたことがわかる。
- 6 Vgl. Ute Frevert: „Mann und Weib, und Weib und Mann“ *Geschlechter Differenzen in der Moderne*. München 1995, S. 181-183.
- 7 Vgl. Ute Frevert: *Frauengeschichte*. S. 87.
- 8 この手帳には雇用者による勤務評定も記入される。  
Vgl. Weber-Kellermann: a.a.O., S. 124-127.
- 9 裕福な家庭以外では奉公人はこの「ひとり女中」(Alleinmädchen) で、最大の仕事に最少の賃金しか得られなかった。同時代の工場労働の賃金の方がはるかによかったのである。  
Vgl. Frevert: *Frauengeschichte*. S. 85.
- 10 このベルリンの悪名高い「吊り棚」については、『シュテヒリン湖』の中に、実際にどのようなものであったかが詳しく述べられている箇所がある。女中として働いている門番の姪がそのひどさについて訴える。「[……] わたしがベルリンへ来た頃には、まだ吊り棚なんかがあったのよ。」[……]「そうね、聞いただけじゃ、十分とはいえないわ。ちゃんと知らなきゃだめよ。それはきまって台所にあって、かまどのすぐそばとか、ちょうど向かいにあることもあるわ。それで、梯子をのぼってね、疲れてると、ころげ落ちたりすることもありして。でもたいていはなんとかなるのよ。そんでもってね、扉を開けて、体を穴ぐらにすべりこませて、そうまるでパンを焼くかまどに入るみたいにね。[……] ただ、これだけは言えるわ。たとえねずみがいても、干し草置場の方がましよ。それでね、最悪なのが夏なのよ。外は三十度で、かまどは一日

中火をたいているでしょう。実際もう焼き網の上にのっかってるようなもんよ。わたしがベルリンへ来たころはこんなだったのよ。[……]」このように女中自身に吊り棚というものを糾弾させることによって、女中の労働環境の劣悪さが示されている。

Theodor Fontane: *Werke, Schriften und Briefe*. Hrsg. v. Walter Keitel und Helmuth Nürnberger. Dritte, durchgesehene und im Anhang erweiterte Auflage. München 1994, Abteilung 1. Band 5. S.147f.

- 11 女中にも階級があって、ふつうは上から子守女、料理女、部屋女中という順番で差別化されていた。  
Vgl. Weber-Kellermann: a.a.O. S.131.
- 12 Vgl. Frevert: *Frauengeschichte*. S. 113-116.
- 13 Vgl. Helmuth Nürnberger: *Fontanes Welt*. Berlin. 1997, S.368.



Theodor Fontanes *Effi Briest* und *Die Poggenpuhls*  
Frauenleben. Die adlige Frau und das Dienstmädchen.

Toyo Akaki

In *Effi Briest* und *den Poggenpuhls* handelt es sich um das Leben des preußisch-junkerlichen Adels. Über die Figuren dieser Werke herrschen die ihrem Stand eigenen gesellschaftlichen Normen.

Mit der Beschreibung der Wohnung Poggenpuhls erklärt sich, daß diese alte Familie schon ziemlich verarmt ist, aber sie hält Standesbewußtsein fest. Was sie zu bewahren hat, ist ihre Ehre. Während Effi aus dem Zwang der Normen Baron Innstetten heiratet, gehen drei Töchter Poggenpuhls keine Ehe ein, weil sie sich keine standesgemäße Ehe leisten können. Die adlige Frau mußte sich als Kind mit den Interessen ihres Vaters identifizieren, und nach der Heirat mit denen ihres Mannes. Die Erziehung der adligen Eltern im ausgehenden 19. Jahrhundert verlangt von ihrer Tochter nicht Selbständigkeit, sondern Gehorsamkeit gegen Männer.

Die einzige Aufgabe der Adligen ist die gesellschaftliche Repräsentation. Der Müßiggang des alltäglichen Lebens beängstigt Effi, und das verursacht die endgültige Tragödie. Die Untätigkeit der Adligen beruht auf den Dienstmädchen, die der Unterschicht der umliegenden Kleinstädte und Dörfer entstammen. Die Adligen können in ihrem Lebensstil das Dienstmädchen nicht entbehren, denn es wird als nicht ‚lady like‘ betrachtet, daß die adlige Frau die Arbeiten im Hause selbst ausführt. Fontane beschreibt neben dem Leben der Adligen das gewöhnliche Leben der damaligen Dienstmädchen.

Die Form der beiden Werke unterscheidet sich. Die Handlungslosigkeit *der Poggenpuhls* führt zu Fontanes letztem Roman, *Der Stechlin*.